

マーク・ロスコ《ロスコ・チャペル壁画》にみる次世代の美術動向への応答

一橋大学 森 卓也

アメリカ抽象表現主義の画家マーク・ロスコ (Mark Rothko, 1903-1970) は、1971年にアメリカ・ヒューストンに建立されたロスコ・チャペルのために14点の壁画を制作した。同地のコレクターであるジョン・デ・メニルと妻ドミニクによって計画されたこのチャペルは、当初カトリック教徒のために建立される予定であったが、最終的には多くの宗教に開かれたチャペルとして建立された。

本作品は先行研究において主にロスコの制作理念との関わりの中で、作品単体のみならず鑑賞空間全体を作り上げることを希求したロスコの画業の集大成として論じられてきた。だが、1971年のチャペルの完成を待たずしてその前年にロスコが自ら命を絶っている事実を考慮すると、ロスコによる純粋な制作理念の希求という、内発的な動機だけを作品に認めるのは難しいと考えられる。これについて、ロスコの伝記的研究の第一人者であるジェイムズ・E・B・ブレズリンの文献では、抽象表現主義への反動として1950年代後半ごろから台頭してきたネオ・ダダやポップ・アートといった次世代の美術動向に対するロスコの葛藤が仔細に記述されている。しかし、具体的にそれらがロスコにいかなる影響を及ぼしたのか、またロスコがいかなる応答を試みたのかについては十分な研究がなされていない。そこで本発表では、次世代の美術動向への応答という観点からロスコが本作品に込めた意図について論じることを試みたい。

まず、《ロスコ・チャペル壁画》に至るまでの作品の様式変遷について概観し、ロスコが「人間の基本的な感情—悲劇、恍惚、運命—」という普遍的な主題をリアリティのある体験として伝えるために、抽象的な色彩と形態が流動する効果を用いて観者の内に直接「運動の感覚」を喚起させようと目論んでいた点を確認する。続いて、カトリック教徒ではないロスコがチャペルの壁画制作の依頼を喜んで引き受けた背景として、次世代の美術動向に対して葛藤を抱え、その応答の必要に迫られていた状況を整理する。次世代の美術動向を担う美術家たちは、マスメディアに氾濫する記号的なイメージを自らの作品に引用して芸術と大衆文化の境界を解消し、作品に反復性をもたらした。それによって平面的な性質を持つ作品は単なる反復可能な記号的イメージとなって「アウラ」を喪失し、大衆文化に組み込まれていった。そのような動向は、鑑賞体験を通じて普遍的な主題を伝えることを希求し続けたロスコにとっては到底許容できないものであった点を指摘する。そして、この作品の反復性による「アウラ」の喪失という課題を克服すべく、《ロスコ・チャペル壁画》においてロスコが観者に建築全体で「運動の感覚」を喚起させることによって三次元的な体験を作り出し、鑑賞体験の一回性を再獲得しようとした可能性を提示し、本発表の結論とする。